

もくじ

大久保家資料の紹介③ 千住宿の地漉紙問屋と問屋株 … P1
あだち民具図典⑩ 胞衣の容器 … P3

足立史談

第662号

2023年4月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

大久保家資料の紹介③

千住宿の地漉紙問屋と問屋株

郷土博物館



写真1 紙すき碑（千住大川町、氷川神社所在）

天保十四（一八四三）年に原碑が建立されましたが、荒川放水路（現、荒川）の建設に伴って大正六（一九一七）年、現在地に移転、再建されました。江戸の紙不足を救ったことを誇っています。

1 流通の町、千住宿の象徴

千住宿は江戸四宿（千住、品川、板橋、内藤新宿）の中で、もっとも大きな宿場でした。人口約一万人を誇り、第二位の品川宿が六〇〇〇人台で推移、板橋、内藤新宿は二五〇〇人を超えませんでした。

その最大の産業が、流通業、すなわち問屋業でした。問屋を営んだ江戸時代の建物で現存するものは唯一、千住四丁目の横山家住宅です（下、写真2）。

この横山家は地漉紙問屋（じすきがみどんや）です。連載で紹介している紙屋伊助家（大久保家）も同じ四丁目で問屋業を営む地漉紙問屋であり、さらに両家は現在も縁戚関係となっています。

その発展の原動力は問屋制家内工業であった地漉紙（じすきがみ）の生産差配と流通でした。地漉紙とは古紙を再利用する再生紙です。一般的に使い捨ての紙として知られていますが、紙の原料が限られていた江戸時代には、絵に用いる紙、浮世絵の紙、手紙や証書類などの紙、そして使い捨ての鼻紙、便所の落とし紙など、さまざまな用途がありました。

紙の原料が海外から輸入され始めた明治時代以前、江戸時代の使用済みの紙は貴重な資源でした。江戸の古紙だけではなく「下りもの」といっ



写真2 宿場時代の問屋建築で知られる横山家

た京都や大坂で使用した紙が、遠路はるばる舟で千住に入ってきていました。

2 紙すき碑

上に掲げた写真1は、千住大川町の氷川神社に建立されている「紙すき碑」です。碑の上部に象徴的な「永」という記章は、台石に記されている「永続連」という地漉紙問屋の人々が結成していた株仲間のしるしです。株とは、問屋業を営む権利のことで、天保十四（一八四三）年段階で、二一軒の名前が記されています（次ページの翻刻1参照）。

建立の契機となったのは、幕府から命じられた地漉紙の緊急生産を成し遂げたことです。地漉紙の原料と

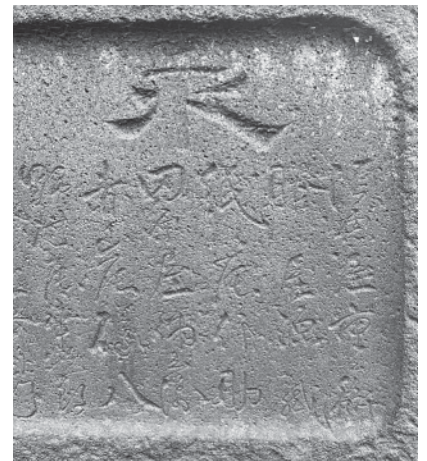
■翻刻1 紙すき碑台石の地漉紙問屋の人々 摩耗が進み判読困難な文字もあり『ブックレット足立風土記』① 30pを参考に作成した。右から3行目の「紙屋伊助」が大久保家、左から6行目の「松屋佐助」が横山家。

連	続	永
木屋 新兵衛	木屋 源助	紙屋 伊助
十一屋 栄右衛門	木屋 徳兵衛	田原屋 弥兵衛
龜田屋 喜助	庭田屋 左右衛門	赤山屋 藤八
釜屋 吉兵衛	松屋 儀兵衛	野村屋 栄次郎
丸屋 庄兵衛	松屋 佐助	紙屋 兵右衛門
松屋 儀兵衛	伊七屋 又吉	いま屋 福兵衛
須原屋 重兵衛	かみ屋 元右衛門	伊七屋 又吉
勝田屋 徳兵衛	三河屋 三次郎	三河屋 三次郎
須原屋 重兵衛	木屋 源助	木屋 源助

なる古紙不足から江戸の紙不足と価格高騰が背景です。なお本項は山野健一さんの研究からご紹介しています※。

■町奉行からの緊急生産命令 緊急生産を命じたのは天保十二(一八四一)年に南町奉行となった鳥居忠耀(ただてる)でした。時代劇などでも登場する人物で、水野忠邦の天保改革で登場し、江戸市中を取り締まった剛腕奉行として有名でした。あまりの厳しさを

写真3 3行目の「紙屋伊助」の名前



ら通称の「耀蔵」(ようざう)に受領名の「甲斐守」をあわせて「ようかい(妖怪)」というあだ名が知られます。

天保十四年の六月二十九日、千住の地漉紙問屋「一同」が奉行所に呼び出されます。奉行所から「地漉紙が払底し、高値になっている」ので「急いで地漉紙をすき立てて潤沢にするよう」命じられたのです。千住の地漉紙問屋たちは、七月七日には六万把(一把の枚数は未詳)を緊急生産して奉行所に報告、そこで褒賞をうけ、江戸の窮状が改善されたことを知ります。さらに問屋たちは大坂からの古紙の仕入れに奔走しました。こうして江戸府内の地漉紙不足が解消されたのです。

※山野健一「元方問屋と地漉紙流通をめぐる一考察」(『足立区立郷土博物館研究紀要』第二八号、平成十九・二〇〇七年)

■碑文と永続連の人々 前項を踏まえて紙すき碑を見てみましょう。前書きに「水無月のつこもりの日、公より紙のすき立て仰せ付けられるとせ」とあり、主文に「すきかえしせさするわさは田をつくるひなの賤らにあにしかめやも」という和歌が記されます。

江戸の重要な物資不足を解消したこと誇らしく思い建立した経緯が目に見えるようです。千住は代官支配地の江戸府外でしたが、江戸の町奉行、鳥居忠耀が支配を超えて増産命令を出しました。このことは千住宿と足立が江戸と不可分の産業構造だったことを物語ります。さて碑の台石の問屋たちの名前のなかに本連載に登場する紙屋伊助の名前が見えます(写真3)。

3 問屋株の証文

千住宿の地漉紙問屋の成立は享保年間(一七一六〜三六)とされます。大久保家の古文書では、その問屋株を取得した証文がありました(翻刻2)。寛政十二(一八〇〇)年に千住河原町の佐野屋善六からの取得です。問屋

■翻刻2 問屋株の取得証文(大久保家文書)

売渡申証文之事

一 地漉紙元方問屋株式名代
右者、千住宿地漉紙元方問屋拾七軒組合
仲間内二而、我等儀紙商売致来候処、当時
商売相休候二付、右株式名代親類仲間
相談之上、其元江金拾兩二売渡、只今
加判人立合、金子不残儘ニ請取申取正也。
然ル上者、拾七軒組合仲間内江御加入被成、
紙商売可被成候。右之通売渡申上者、親類
不依何者ニ、横合より構申者一切無御座候。為
後日、株式名代売渡証文仍而如件。

寛政十二年申七月 地漉紙元方問屋
賣渡人 佐野屋善六 印
証人 丸屋庄兵衛 印
西見屋 伊助殿

前書之通、佐野屋善六紙問屋株式
名代売渡候二付、奥印致、相渡申候、以上。
申七月 大行事 伊勢屋弥兵衛 印
水戸屋吉兵衛 印
須原屋重兵衛 印

※「西見屋」は別号

あだち民具図典¹⁹ 胞衣の容器

■胞衣とは 胞衣（えな）とは、出産後に排出される胎盤や臍帯、羊膜などの総称です。後産（のちざん）とも呼ばれます。東京都では現在「胞衣及び産汚物取締条例」という条例によって取扱業者や処理の方法が細かく決まっております。専門の業者が病院などで胞衣を収集して処分しています。最近ではプラセンタという名前で胎盤を利用した健康食品や医薬品で聞き馴染みがあるかもしれません。

現在でこそ、胞衣の取り扱いには条例によって決まっていますが、かつて胞衣は母子の身体や人生に影響をもたらす存在とされ、各地で特別な扱いを受けてきました。

郷土博物館が所蔵している胞衣の容器は、平成六（一九九四）年に千住日の出町に住む方から寄贈を受けたものです。【写真1】

胞衣の容器は蓋つきの素焼きで、上蓋が直径一六・七、高さ三・八、容器が直径一五・八、底面九・八、高さ七（いずれも単位はセンチメートル）です。容器の底と蓋の裏側には「寿」の文字が押印されています。【写真2】

胞衣は子供の成長に影響を与える存在であると考えられ、容器などへ入れて埋めたりしていました。このような胞衣の習俗は少なくとも奈良時代までさかのぼり、遺跡の発掘調査などでも胞衣を入れたと考えられる壺や皿が見つかることもあります。藤原道長の日記「御堂関白記」の寛弘六（一〇〇九）年十一月二十五日には「蔵御胞衣東方（御胞衣を東方に蔵す）」と記されています。（注1）

衣は、骨もないため長年の間に分解されてしまいます。縄文時代に胞衣を埋める習俗がおこなわれていたかどうか不明なものも胞衣が残っていないからです。しかし、伊達家の墓から出土した胞衣桶からは胞衣の組織が発見されており、実際に胞衣を入れていたことが判明しました（注3）。

■足立区での胞衣の取り扱い 山口和晃氏が研究した関東地方の胞衣に関する習俗によると（注4）、関東地方では、胞衣を戸口に埋める例が多く、事例は少ないながらも土間の隅に胞衣を埋める事例も広く分布しています。また、胞衣と一緒に米や魚を埋めたり、将来を願って男子なら筆、女子なら針と一緒に埋めたりしました。

乳不足にならないことを願って水や産湯と一緒に埋めたり、胞衣を埋めた上からかけたりする例もあります。胞衣を埋めた上を踏んだ動物や昆虫などを子供が怖がるので踏まれないところに埋める、あるいは逆にそれを恐れるようになるとも言われています。

胞衣を処理する場所も多様で、戸口や土間、縁の下など家の周辺から、川辺など遠くまで多様な場所で処理されていました。

足立区がまとめた人生儀礼の報告書には、区内各地の胞衣の処理についての事例が報告されています（注5）。花畑地区では胞衣を乾（北西）の



写真1 胞衣の容器
法量 上蓋 16.7 × 3.8、
容器 15.8 × 7



写真2 底面の「寿」の字

らままとって出土しました。胞衣皿と一緒に徳利も出土しており、母乳の出がよくなるようにとの願いが込められていると考えられています（注2）。

東京都港区瑞聖寺の伊達家の墓域からは胞衣桶が出土しました。胞衣の容器に入れられた胞

方角に埋めました。

伊興地区では胞衣を犬に掘り返さ
れないくらいに深さの穴を庭に掘っ
て埋めたり、雑貨屋で購入した素焼
きのイナツボに胞衣を入れ、帯祝い
(注6)の時にもらったサラシに結わ
えてあった麻縄で壺を結わえて鬼門
を避けて埋めたりしました。

江北地区では胞衣を素焼きの胞衣壺
に入れ、麻の葉で包んで屋敷内のその
年の吉方に埋めたほか、人に踏まれな
いように台所の隅に埋めました。胞衣
壺を包む麻の葉は魔除けを意味するも
ので麻の葉文様は産着にも用いられま
す。胞衣に悪いものが近寄らないよう
に思ったのでしょうか。

舎人地区でも方角を見て胞衣を埋
めました。

また、鈴木裕子氏と足立女性史研究
会によると、出産が済むと、吉方の庭
の隅の日陰に穴を掘って胞衣を埋めて
百日間は踏んではいけないという習俗
と、なるべく多くの人に踏まれるよう
に戸口の下に胞衣を埋めるという習俗
が記録されています(注7)。

積極的に胞衣を踏むことと、胞衣
が踏まれることを忌避することは、
逆転した習俗ですが、いずれも「踏む」
という行為を特別なものとして認識
していることがわかります。このよ
うに胞衣は子供の成長と密接に結び
ついており、人々は胞衣に対して特
別な認識を抱いて処理していました。

■近代の胞衣処理の変化 一般の人

の手で処理されていた胞衣ですが、
明治時代になると胞衣の処理方法は
大きく変わってきます。明治二〇、
三〇年代にかけて胞衣の処理を取り
締まる法令や規則が各地で制定され、
胞衣はおもに公衆衛生的な観点から
汚物として取り扱われるようになり
ました。規則の制定により胞衣処理
業者が活動しはじめ、産婆や産家を
訪れて胞衣を収集しました。産婦は
かわらけを用意し、その中へ胞衣を
納めて業者に引き渡しました。

足立区では産婆が胞衣会社へ連絡を
すると、一週間以内にリヤカー付き自
転車に乗った老人が胞衣を回収したと
いう報告が残されています(注8)。

当時の胞衣処理業者はただ胞衣を廃
棄するだけでなく、胞衣の供養のた
めのお祓いすることもありました(注
9)。胞衣処理業者は安産の神である
宮城県塩竈神社の祠に胞衣を焼却した
灰を祀ることが多かったそうです(注
10)。近代的な衛生施策下においても
胞衣に対して特別な認識が持たれてい
たことがうかがえます。

■郷土博物館の胞衣皿 当館が所蔵
している胞衣の容器も、近代期に作
られたものと考えられます。業者が
扱うようになって素焼きの容器に
納められて引き渡されたため、胞衣
埋めに使用されたものかどうかはわ
かりません。素焼きであることから

も、使い捨てというだけではなく神
事などで用いられる特別な器という
意味もありました。また、「寿」の文
字からは、容器が単なる胞衣の処理
だけではなく、子供の誕生を祝う意
味が込められていることがうかがえ
ます。

■胞衣の現在 現在、胞衣は公衆衛
生、公共の福祉的な見地から処理さ
れており、お産などを行う病院を窓
口として進められているのが一般的
です。しかし、医療などの分野で胞
衣は利用されています。胎盤やへそ
の緒に含まれる血液(臍帯血・さい
たいけつ)の中には血液を作る細胞
が含まれており、白血病などの治療
に用いられます。

また、豚や馬の胎盤などとともに、
プラセンタとして、アンチエイジン
グ、美容に利用され、プラセンタエ
キスを含んだ商品も多く販売されて
います。

民俗的な心性の下で処理され、近
代になると衛生施策下で処分となっ
てきた胞衣ですが、科学技術の進歩
や見直しにより、プラセンタと名を
変えて、科学的な装いをもって認識
が変わってきているのです。

(郷土博物館専門員 間所瑛史)

【注】

1 中村禎里一九九九『胞衣の生命』
海鳴社・正宗淳夫編纂『御堂関白

記 上巻』日本古典全集刊行会、
一九二九

2 東京都教育文化財団編「千代田
区永田町一丁目遺跡Ⅱ」『東京都
埋蔵文化財センター調査報告』三〇
八集、二〇一六

3 勝又義直・山本敏充・打樋利英
子ほか「瑞聖寺伊達家墓域出土『胞
衣桶』の胞衣組織の同定」『考古学
と自然科学』三七、一九九八

4 山口和晃「関東地方における胞衣
習俗の研究」『世間話研究』二五号、
二〇一七

5 足立風土記編さん委員会・足立
区立郷土博物館編『人生儀礼(足
立風土記資料)』足立区教育委員会、
一九九二

6 帯祝いは妊娠五ヶ月目の戌の日
に子供が健やかに生まれてくるよ
うに腹帯を巻く儀礼です。戌の日
におこなう理由は、犬は多産であ
り安産の象徴であるからです。

7 鈴木裕子編、足立女性史研究会
『足立・女の歴史 葦笛のうた』ド
メス出版、一九八九

8 注7に同じ
9 佐々木美智子「旧小右衛門新田に
見る人の一生」『足立史談』二〇九
号、一九八五

10 猿渡土貴「近・現代における胞
衣処理習俗の変化 胞衣取扱業者
の動向をめぐって」『日本民俗学』
二二六、二〇〇一